780.2
A12
(H0)

近代スポーツマンシップの誕生と成長

阿部 生雄 著

寄贈
筑波大学
出版会

筑波大学出版会

08022621

序

スポーツの社会機能や人間形成機能に注目し，「スポーツは社会に融和と秩序と慰安をもたらす」とするスポーツ観は，古くから存在した．しかし，スポーツのそうした機能を集約した「スポーツマンシップ」が，倫理的なイデオロギーとして成長を遂げ始めたのは，19世紀になってからのことであった．従って，「スポーツマンシップ」とは，本質的に「近代スポーツマンシップ」なのであった．

19世紀中葉のイギリスにおいて，旧来のキリスト教的な身体観や遊戯観を超えてスポーツやゲームを擁護しようとする「筋肉的キリスト教」ムーヴメントの胚種は，1850年代に，はっきりとパブリックスクールに着床した．グレートパブリックスクールという有名校を越えて，新設されたパブリックスクールでも，ほとんど一様に，興隆しつつあった「アスレティスズム」を正当化する言説を開発し，スポーツとゲームを学校教育の無視し得ぬ領域に位置づけたのであった．

ラドレー校（1847年設立）のシーウェル校長（W. Sewell）は，1858年に次のように生徒達に熱く語りかけていた．「君たちのゲームは，（中略）君たちの肉体だけでなく魂の試練であり訓練である．それらは神の鍛錬なのである」とし，「キリスト教徒の目からすると，君たちの対抗し合うゲームは極めて重要であり，神聖であり，尊厳のあるものなのである．それらは私にしてみると，宗教的な崇拝に匹敵するものである．それらなくして，また，このような競い合いを，それゆえに人生の大きな競争の中で，しっかりと自らを行動させるように教えられていないと，君たちの教育は偏った不完全なものとなろう．そのような教育は無用である」[1] と説教するようになっていた．

ソーシャル・ダーウィニズムの思潮を背景に，ゲームやスポーツは，競争，闘争，戦闘，戦争というアナロジーで捉えられ，「適者」や「強者」を産み出す教育的・文化的装置である「ナショナル・ゲーム」と目されるようになり始

めた.「(ゲームのもたらす) 闘争こそがエネルギー, 忍耐, 持久力, 勇気, 目敏い観察, 実行の敏速さ, 警戒, 機転, 周到さといった最も男にとって必要な, そしてまた最も団体によって希求される精神と肉体のあらゆる能力を引き出すのである. このことが, なぜクリケットはフットボールよりも高貴であるのかの理由である. クリケットがこのような徳や能力を行使するがゆえに, 特にナショナル・ゲームとされるのである. イギリスのパブリックスクールは, 必ずやクリケットに卓越しているものなのである.」[2)]

ハースピアポイント校 (1849年設立) でも, 生徒達は, 1858年の校友会誌で, ゲームを次のように捉えていた.「機敏さと決断力, 観察の早さ, 環境への適応力, 常識, マンリーな野心, 冒険的精神, これらすべてはそれらを常に実行することによって習慣となり, 練り上げられる. (中略) そしてここでは, 忍耐力が育まれ, 洞察力と確実な眼力, 足の速さ, 胆力, エネルギーといったすべてのものが, 健全な競争の精神の影響のもとで十全なものとなる. 一方, 学校という小世界の中の対立は徐々に消失し, 性格やマナーの特異性を和らげ, 生徒達をより大きな世界に適するようにして送り出すのである.」[3)]

スポーツマンシップ・イデオロギーの発生と成長は, 明らかにパブリックスクールのスポーツやゲームの実践と関係があった. 言葉を換えれば, 19世紀におけるイギリス帝国主義の拡張を背景にしたパブリックスクールにおけるアスレティシズム (運動競技礼賛) の興隆と, その「スポーツ教育」化という動向と関係があった.「スポーツマンシップ」は, 次第に, 単にミリタントな男性資質を表現するだけでなく,「ジェントルマンシップ」とならんで, あらゆる人間の徳性を糾合するキー概念となり始めた.

「スポーツマンシップ」という概念は,「フェアプレー」,「アマチュアリズム」,「敢闘精神」,「団体精神」,「名誉心」,「向上心」という理念や徳性, つまり, 人間の高潔な倫理と公正さ, 利害を超える非物質的な美意識と遊戯精神, 闘争心と友情, 集団的・組織的・社会的規律への遵法, 名誉を求めて自己を高めようとする挑戦, といった多様な理念や徳性, 動機や行為を包摂するものとなり始めた. そこに包摂される要素が互いに対立や矛盾を抱えていても,「スポーツマンシップ」は, 高潔な道徳的資質を表示する最も利便性の高いキャッチオール概念として, そしてまた市民的道徳の代名詞として目覚しいイデオロギー

的成長を遂げたのであった．それは，様々な思惑を超えて，スポーツをすること自体が「徳行」となり得るのだ，という理想主義的な信念を表明し始めたのであった．その意味で，「スポーツマンシップ」は，その語源学的な実証性を離れて，19世紀になって成長を遂げたアスレティシズムとパブリックスクールの道徳的情熱によって産み出された，思想史上の新造語なのであった．

1960年，イギリスのコミュニティースポーツを計画したウォルフェンデン委員会の報告書である『スポーツとコミュニティー』(*Sport and the Community*) は，スポーツを地域社会に普及するにあたって，「若い男女に奨励することが大切な冒険心，協力，自立心，勇気，忍耐という資質」[4] を発達させることを望んでいた．翌年にこの報告書が上院で議論された折りにも，キルマー伯爵 (Viscount Kilmuir) は，スポーツは「勇気，忍耐，自己鍛錬，決断力，自立心といった，かくも貴重な資質を発達させる．」[5] と発言し，スポーツが人間形成に果たす役割を強調した．

1977年，イギリスの下院では，スポーツの社会統合機能に注目した「一日を終えると，スポーツはわれわれの社会を一つにする要素となる．われわれの政治，宗教，人種が何であれ，スポーツはわれわれを一つにする．」[6] という発言がなされた．少なくとも1970年代頃まで，「スポーツマンシップ」は，人々を高潔にし，社会に融和をもたらすような理念として，また共同幻想として，人々を呪縛する能力を宿していたといえよう．

しかし，今日，「スポーツマンシップ」は，逆に，人々の意識と行動を既存の社会や国家の秩序に順応させ，社会秩序に向けて人々を動員する保守的イデオロギーとして機能した，という根強い批判と不信を向けられている．そうしたイデオロギーに対する批判からか，今日，「スポーツマンシップ」という言葉は，ネガティヴでナイーヴなニュアンスを帯びている．その言葉を言うことも，聞くことも気恥ずかしい，という人々が結構多いのではないかと思う．その気恥ずかしい感覚に加えて，今日，スポーツマンシップのイデオロギー性が自明化し，道徳形成のための信奉の対象として，ほぼ完全に機能不全に陥っていると感じている者も少なくないであろう．結果として，今日，「スポーツマンシップ」という用語は，時代遅れで，やや古風な言葉として，ようやく命脈を保っているというのが真実であろう．

本書も，21世紀に突入した今や，スポーツを取り巻く環境が劇的に変化したことから，「スポーツマンシップ」は，もはや個人の人格や道徳資質の向上を誘うキャッチフレーズではなくなり始めているという認識に立脚する．20世紀を経る中で，「遊び」を創造してきた19世紀に発達を遂げた遊戯精神と美意識とリベラリズムが，アマチュアリズムと共に崩壊し，商業主義，マンモニズム（拝金主義），プロフェショナリズムと勝利至上主義，過剰なヒロイズム，政治体制や国家主義や民族主義によるスポーツの政治的手段化，スポーツと軍事の結合，労働と余暇の不調和，先進国と従属国との間にあるスポーツ配分の不均衡，階級／人種／性差／身体障害に付随するスポーツ差別，薬物利用と暴力，メディアによるスポーツ支配，スポーツによるエコロジー破壊等々，といったスポーツを取り巻く諸問題が，遙かに「スポーツマンシップ」という個人の修養プログラムを凌駕し始めたからである．

また，21世紀スポーツのアジェンダは，拡散するグローバリズムと消費文化の中で，スポーツのグローバルスタンダードの模索と，未来を先取りするニュー・スポーツの創造を求めている．その一方で，そのアジェンダは，伝統スポーツと先住民スポーツの回復を展望している．消費文化とグローバリゼーションの中で増殖する近代スポーツや「脱」近代スポーツと，伝統というアイデンティティへの回帰と再生を志向する民族スポーツが鼎立しつつ共存しているといってよい．今日，スポーツは，地域，国家，民族を超えて享受／共有できるようなグローバルスタンダードを構築しつつも，ポスト・コロニアルな多元主義の台頭の中で，未だ共生すべき地平を見出せないでいる．果たして，21世紀には，20世紀的なスポーツのインターナショナリズムの綻びを縫合するような，スポーツの「多元的グローバリゼーション」と「共生」をもたらすことができるのであろうか，またそのことを可能にするような「スポーツマンシップ」を生み出すことができるのであろうか．

本書は，もちろん，こうしたスポーツの現代問題に対して有効な解答を提起しようとすることを直接的に意図しているものではない．しかし，スポーツを愛好するスポーツマンとスポーツウーマンは増加しつづけ，世界の各国や地域で，世界規模で，「スポーツの時代」が到来している．今日，われわれの「スポーツ」を取り巻いているすべての問題は，われわれがいかに「多元的グロー

バリゼーション」と「共生」を可能にするような「人間」的存在として，また「人類」の一員として存在し得るのか，という問題と深く関わっているように思われる．即ち，「近代スポーツマンシップ」をどのように脱構築できるのかに懸かっているといえよう．

本書が，もし，一つの役割を持てるとすれば，「スポーツマンシップ」ムーヴメントをもたらした19世紀的な道徳的情熱の発露を再現し，「スポーツマンシップ」の普及と伝播を追う中で，新たな「スポーツマンシップ」の可能性を秘めた胚種を模索することであろう．そしてまた，19世紀以来込められてきたその道徳的情熱の意味を問う中で，今日のわれわれには「人間」らしさを回復しようとし，「人間」的存在として，また「人類」の一員として，さらに，「スポーツの時代」の地平を切り開いて行く「スポーツマン」としての義務と勇気があるのだ，ということを伝えることであろう．

本書は，18世紀～19世紀にかけてイギリスで近代化を遂げ始めた「近代スポーツ」と，その形成を支えた精神に注目し，「スポーツマンシップ」という概念に変更を加えた道徳的情熱の姿を明るみに出そうと試みるものである．第一編で「スポーツ」と「スポーツマンシップ」の概念変容を明らかにし，この言葉に倫理的ニュアンスが加わる時期を特定する．次いで第二編で，イギリス近代スポーツの形成を概観した後，その形成に関与した幾つかの出来事や思想に垣間見られる「精神」に注目する．この場合，精神とは，「エトス」であり，近代スポーツの無限定で無原則な形成や自然的成長を許容しない，非物質的なものを含む拘束性のことである．ここでは特に，ラグビー校のアーノルド校長のスポーツ教育，ウィンチェスター校のモバリー校長のアスレティシズムに対する干渉，クラレンドン委員会のパブリックスクールに関する報告書，そしてラグビー校におけるウィリアム・ウェッブ・エリスの神話化を取り上げる．第三編では，近代スポーツマンシップの胚種をもたらした「筋肉的キリスト教」に注目し，キングズリとヒューズの作品群に見られるスポーツマンシップを解読して行く．第四編では，イギリスのスポーツマンシップの伝播を追い，近代オリンピックの創始者であるクーベルタンの「オリンピズム」への接続と，イギリスのお雇い外国人教師であるストレンジの影響の下で，イギリス的スポーツマンシップを日本的な変種に育て上げた武田千代三郎の「競技道」に注目し

てゆく．

ここに掲げたすべての論考は，すでに発表したものである．幾分か手を加えたものの，長年の時間を経過していることから，本書の内容に一貫性が欠ける場合もあり得ることをお許し願いたい．読者のご批判とご叱声を心から願う次第である．

2008年12月

阿部生雄

引用文献

1）Sewell, William., *Sermon to Boys*. Vol. II., Wassall, 1858, pp.348–362.
2）Ibid., 1858, pp.348–362.
3）*The Hurst Johnian*. Vol. 1, No.6, November 1858.
4）Report of the Wolfenden Committee, *Sport and the Community*, CCPR, 1960, p.6.
5）McIntosh, P.C., Charlton, V., *The Impact of Sport for All Policy*, The Sports Council, 1968, p.7.
6）Ibid., p.17.